

# ダウナー系の彼氏が嫉妬に狂った結果、 電マでいじめられてから抜かすの3連発と いう悲劇にありました

体験版

ダウナー系大学生×おっとり系大学生

受け：三樹（みつき）

攻め：爽（そう）

要素：拘束、電マ、連続絶頂、騎乗位

「ねえ三樹。なに、コレ？」

バイト終わり、シャワーを浴びてスッキリしたはずの僕の目の前には、どろどろに濁った目をした恋人が待ち構えていた。彼が握っているのは、家に帰ったら捨てなければと思っていた袋。ああ、こうになってしまう前に隠ぺいしなければいけなかったのにと、捨て忘れた15分前の自分を呪う。

だが、見つかってしまったものは仕方がない。ここで言い訳をすると逆によくない結果が待ち構えているので、いっそ正直になろうと、彼からの尋問を受けることにする。

「な、なになって、見ての通りお菓子だけど」

「うん。そうだね。しかも手作りじゃん。こんなあからさまに三樹にアピールしてるヤバいもの、わざわざもらったわけ？」

「いいい、いや、それはゼミの皆にとって、僕以外の人ももらってたし。さすがにその場では受け取るしかなかったというか」

「でもこれ、手紙入ってんだけど？友達にやるお菓子に、わざわざ手紙入れる？」

「えっ、そ、それには気が付かなかった…」

「うんうん、三樹が騙されやすくて、いい奴なのは俺も分かってるから。まあ、これは全部捨てるんだけど」

「あゝ ああ！」

キッチンにあったゴミ箱に、綺麗にラッピングされたマフィンが袋のまま捨てられていく。普通に美味しそうだったのに。彼にバレる前なら食べてもいいとすら思ったのに。だけど僕から咄嗟に出た悲しい声は、爽の怒りを煽る結果になった。ニコリと微笑む彼のこめかみには、ピキリと効果音がつくくらい綺麗に血管が浮かび上がる。まったく笑っている人が醸し出す雰囲気じゃない。彼の空気に、思わず僕もすくみ上がる。

「あのさあ、三樹。俺の見てないところで浮つくのやめてもらっていい？てか隙だらけなのもよくないよね。だからこんな露骨な色目使われても気づかないんだって」

「や、あ、でも、やっぱりあの場で断るわけにはいかなかったしさ」

「はあ…。やっぱり口で言っても分かんないんじゃないね。じゃあいいよもう。俺が分からせるから」

「えっ、分からせる、っていうのは」

完全にキレている爽は、僕の手首を握ってベッドの方まで移動した。そのまま投げのように放られたかと思ったら、彼はベッドの下から手錠を取り出してくる。なんだよそれ、いつの間にそんなヤバいものを買ったんだと爽を見上げれば、不機嫌なオーラを全開にした目が僕を見つめていた。

「三樹が行動を改めないなら、毎回こういうことするから。されたくなかったら、身体で思い知れよ」

まるでマフィアの脅し文句みたいな言葉にビビる。そして身体をすくませているうちに、ベッドの上の部分と僕の手が、手錠で繋がれてしまった。シャワーから出たばかりの僕は下着一枚しか身に着けていない。ああ、まずい。これはまずいぞ。一体これから何が行われるっていうんだと思いながら、次なる何かを取り出そうとしている爽を涙目で見ていた。

「んんんあああああ！！もお無理無理無理いいっ！！！！イッ、だ、も、あ、あ～～～ッ！！」

「はいはい。気持ちいいのかもしれないけど、ちょっとうるさいよ三樹。ご近所迷惑になっちゃうでしょ？ボリューム気にして喘いでくれない？」

「んんんぎっ！！はひっ、い、む、い、ああ、だ、め、こわれ、る、まっで、も、出な、あ、ひ、〜〜〜ッッ！！！」

縛られた僕に待ち受けていたのは、強烈な電マによる責め苦だった。爽から特に何かを予告されるでもなく、突然下着をはぎとられたかと思えば、いきなり電マを股間に押し付けられた。甘さなんかひとかけらもない触れ方なのに、機械の刺激は強烈で逃げ場がない。振動するだけの玩具に翻弄されて、それほど時間をかけずに達してしまう。

だけど、地獄だったのはここから。イッたら、「反省した？」「もうしない？」と聞いてくれるかと思ったのに、彼は電源を切らないどころか、イッたままの場所に電マを押し当て続けてきた。え、嘘だろ、僕もう出したけどと足を閉じれば、無理矢理左右に広げられて、大きくさらけ出された熱を更に刺激された。ヤバイ、我慢もできずにまたイクと目をつむれば、ガクガクと腰を揺らして少量の精液を吐き出していた。

でも、イッた後も電マは離れていかなかった。それどころか、3回出しても、4回出しても終わりにならない。これ、終わらないタイプのお仕置きなんだ。僕が自分から反省した意志を見せないと終わらないタイプだと、血管がちぎれそうな脳を必死に回して爽に許しを請う。

「ひぎっ！！も、お、ひん、じゃ、あ、あうううっ！！許してっ、お願い、もお許してえええっ！！！」

「ふ～ん。もう嫌？許してほしいんだ？」

「は、うゝ、うううっ...！！あ、は、はいいい...ッ！ごえ、なさ、僕が、悪かったからあっ！！も、もう、ゆう、して、ほしい、です...！」

ガチガチと歯を鳴らしながら、なんとか謝罪の言葉を口にする。すると爽は、ふう、と一つため息をついてから、なぜか僕の中に指を入れてきた。もちろんその間も、電マの振動は弱まっていない。ぬるんと前立腺を撫でられた瞬間、自分の快感の許容量を超えたのか、パチンと音がして視界が弾けた。

「あひう...っ！！？は、はひ、い、あ、ああ...！？」

「こんな風に指入れられて、ちょっとくちゅくちゅしただけで、エッロい声だしてイクくせにさあ。そこら辺の女で満足できるわけないじゃん。なあ、分かる？三樹はもう俺とじゃなきゃダメな身体になってんだって」

「んお、お、あ、ひ、イグ、う、うあ、あ、あああああダメダメ、ごわ、れ、ちゃあ...っ！！」

「勝手に壊れんな。壊すとしても俺が壊す」

「んひいっ！」

ぐりい、と容赦なく前立腺が押されて、本気で息が止まった。かは、と肺に残った空気の残骸が出ていく。はひ、ひい、とその後もしつこく押される度に身体が痙攣して、目からは酸欠で自然と涙がこぼれていく。ビク、ビク、と不自然に身体は跳ねていて、明らかに正しく感じている状態からはかけ離れていた。無理矢

理の快感は苦しい。これ以上はどうにかなりそうだと、僕は息継ぎもままならないのに、どうにか彼をなだめようと必死だった。

「はひゅ、う、ご、め、なさ、も、もら、わな、い、お菓子、ことわ、う、からあ...！ッ、あ、うゝ、ゆる、し、て、許して、くださあ...っ！」

「ホントに反省してる？ああいう色気出してるもらいもの絶対断るって約束する？」

「す、る、するから、もうう...！」

「分かった。三樹がそこまで言うなら、ちょっとだけ信じる」

「はふう...！」

そして僕の懸命な姿勢は、爽の心を動かすことに成功した。カチ、と音を立てた電マが、久しぶりに動きを止める。それでも振動を与え続けられた熱はピクピクと揺れていたけれど、刺激がないなら休憩には違いなかった。中から指も抜けていったのを確認してから、緊張していた身体のを抜く。

でも、ゆったりとベッドに身を横にしていられた時間はとても短かった。手錠を外された時、僕は爽が何もかもを許してくれて、これで今日のお仕置きは終わりのだと勘違いしたのだけれど、それは全くの見間違いだった。彼は僕の上半身を起こすと、胡坐をかいている自分の方に僕の身体を倒した。そのまま僕が彼をまたぐように座らせて、とんでもないことを告げてくる。

「三樹が口ばかりって可能性もあるからさ。許してほしいなら、誠意見せてよ」

「誠意、って、言うとか...？」

「俺、今日はまだ三樹と気持ちいいことしてないんだよね。だからこれ、自分で入れて。そんで三樹が動いて、俺のことイカせてよ」

思わず、えっ、と口から出そうになった。それをどうにか表情に出るまででとどめたのは、ナイスな判断だったと思う。今、どんな無茶ぶりを振られようとも、口答えをしたらまたあの電マ責めからのスタートになってしまうだろう。しかも同じ流れが繰り返されるから、もう僕は黙って言うことを聞くしかないんだ。

にち、と自分の孔に当たってぬめる爽の自身は、しっかり張りつめている。位置を調整して腰を落とせば、ローションの塗られた孔にはするりと入っていくだろう。ただ、入れるのはできたとしても、そこから爽をイカせるほどしっかり動くことはできるだろうか。そもそも動くために足を踏ん張ることも難しそうだが。いや、でもこの爽の目を見てみろ。まだ怒っている。ここで二の足を踏んでいたら、更に酷なお仕置きが待っていてもおかしくない。ここは勇気だ、ガッツだ、根性だ。僕だって処女ではないんだから、しかも慣れ親しんだ爽なのだから、彼を気持ちよくすることくらいと、後先を深く考えずに彼のモノを自分の中に埋めていく。

「ふぐ...っ！！？ん、んゝんん〜〜〜っ！！！！？」

でも、これが僕の想像以上に気持ちよかった。多分、電マで散タイカされてしまったせいで、身体全体が過敏になっているのだと思う。言われてみれば、特に

休憩といったインターバルはなかった。ほぼイキっぱなしの延長にいるんだから、感じるのも無理はない。

一旦、入れ切ろう。入れ切ってから考えようと、ひとまず彼の熱を咥えこむことには成功した。けれど肩で息をしている間も、爽は無言だった。ちらりと顔色を伺えば、ほとんど感情のない顔で僕を見ている。ダメだ、これだけじゃあやはり許してもらえないと、どうにか足の力を入れて腰を持ち上げる。

「ふ、ふう、う、んんんっ！ッ、は、は、はうう...ッ！！」

ずり、ずりと上に動かす度に、彼の熱が僕の内部を擦っていく。奥の深い部分を抜けて、前立腺を擦り、そして入口に向かっていく過程で、全体をしっかりと擦られた。今度はその逆を行わなければいけない。ぐっと唇を噛んだ。こんなの長い時間は持たないとも分かった。それでも彼に誠意を見せるためには動くしかなくて、ノロノロとままならない上下運動を繰り返す。

「はひ、い、あ、あう、んん、んんんうっ！」

「ねえ、何そのノロいやり方。俺、そんなんじゃイケないよ？」

「ふあ、あ、ああ、ご、め、なさっ、でも、あ、だめ、ダメダメ、あんまり、早かったらあ...！」

「じゃあせめて、もっと腰下ろして締め付けるとかすれば？」

「んゝ いいゝゝ いゝ いっっっ！！！！？」



でも僕の緩慢な動きじゃ、爽はやはり満足できなかったらしい。少し苛立った手つきで僕の腰を下ろした彼が、バチンと音が鳴るほど自分の腰を密着させてくる。今まで自分である程度は快感を調整していたせいで、強引に奥まで入れられて、一気に限界点まで引き上げられてしまった。たまらず爽にしがみついて、ギチギチと中の爽を締めあげて出さずにイッてしまう。

「ッ、あ、ああ、あうううう……！」

「ねえ三樹、今イッたよね？誠意見せるって言ったのに、結局自分ばかりよくなっちゃったんだ」

「ふ、ッ、ち、が、違う、ほんとに、ごめんって、思っ」

「もういいよ。三樹、嘘ばかりつくし。ごめんなんて、本当は思っていないもんね？やっぱ身体に言い聞かせるしかないか」

「やっ、それはっ！？」

もちろんイカせる立場のはずの僕が先にイッたせいで、爽は露骨にがっかりした様子だった。ただ、僕側にも落ち度はあるけれど、これは不可抗力みたいなものだ。強引に僕の腰を落としてきた爽だって悪いじゃないかと唇を尖らせると、彼はベッドに投げ出されていた電マを再び手に取った。彼の思考が読めた僕は、無理に身体を捻って悪魔の玩具とは逆の方向を向く。

「まっ！？そ、それは無理、もう無理、い、いいゝ いゝ いいいああああゝ あゝあああ！！！」

でもスイッチ一つ入れれば、僕をいくらでも絶頂に導ける無慈悲な機械は、身体の向きが変わったくらいで刺激を弱めたりしない。ぐにりと先端にあてがわれた玩具の振動で、僕は再び絶頂が終わらない時間に突入しそうになった。しかも今回は、爽の熱も入っている。さっきと違って、身を振った分だけ気持ちよくなるおまけまでついてきた。まずいまずい、これはまずいと、片手で電マを押さえ、片手は爽の肩につきながら、千切れるほどに首を振った。

「んんああああああああ無理無理無理いいゝいゝっっ！！！！ふぎっ、い、イク、の、も、うううゝ〜〜っっ！！はっ、はっ、ふううううあああああごめんなさいごめんなさいいいいい！！もおゝっ！もおしないっ！絶対しないから許してええええっ！！！」

「だってさあ、三樹は目の前にいる俺が、今してほしいって言ったことすら聞けないんだもんね？見てないところで約束守れるかどうか、信じらんないな、俺」

「はぎっ、ッ、ま、もる、ほ、ほんと、に、守る、う、うあ、まっ、強い、いいいいイクイクイツ、あ、は、は、〜〜〜〜っっ！！！！」

「嘘つきの言うことは信じない」

「ひっ、し、ぬ、も、あ、あぐっ、———ッッ！！———  
ッッッッ！！！！！！」

はく、はく、と息もできないくらいにイッて、イッて、怒涛のような絶頂に襲われた。目がチカチカして、どうしようもないくらい苦しくて、ボロボロ涙が出る。途中で自分の身体を支えられなくなって、ベッドに倒れ込んでも、爽は許し

てくれなかった。絶え間なく与えられる刺激に、本当に狂ってしまうんじゃないかと思う。

「んんんぎっ！！はふっ、う、うゝ ～～～～ッ！！ッ、は、は、は、ごえ、なさ、も、許し、で、しない、もお絶対しないからああああっ！！」

「...絶対？本当のホント？」

「ほ、んど、の、本当に、しないっ！！ひゅ、ぐ、も、お、絶対、にい...！」

それでも僕に出来るのは謝罪の一択で、ただただ謝るしかなかった。だけどこれは正解と言えれば正解でもあって、謝り通したところ、どうにか電マの責め苦は終わりになる。やっと終わりだ、死ぬかと思ったと、動きもしない腕をベッドに投げ出す。ひくひくと腹が波打って、無茶をされた熱がドロドロに濡れたまま精気を失っていた。あれだけされたらそうもなるかと、血管がブチブチに千切れていそうな頭で思う。

屍のように動かず、か細い呼吸をしている僕を、爽はじっと見下ろしてきた。だけどその顔はもう怒っている時の彼ではなくて、どこか寂しさを滲ませている。そんな彼に言葉をかけられないまま見上げていたら、爽はぎゅっと僕に抱きついてきた。そのまま腕に力を込めて、先ほどとは打って変わって、圧力のない声で話す。

「...三樹、かわいいから。誰かに取られちゃわないか心配」

そろりと顔を出してくる彼の心の声に、僕の心臓がぎゅんと音を鳴らすのが聞こえる。まったく、回りくどい手を使わずに、最初から素直にそう言えばいいのに。心配だから、手作りのお菓子なんかもらってこないでと正直に言えばいいんだ。どちらかと言ったら、嫉妬に狂って恋人を電マでいじめまくった方が嫌われるぞ。肉体的解決より、話し合いで解決した方がいいのにと、どこか口下手な彼の背に腕を伸ばす。

「爽だけ、だから。浮気なんてしないから...」

爽はおそらく、人より嫉妬深くて束縛欲が強い。でも蓋を開けてみると、ちょっとやり過ぎたと反省する瞬間も見受けられて、それはそれで可愛い所もあるのだ。そしてこういう状態の爽を通常に戻すためには、僕がしっかり爽だけを見ているのだと伝えるのが一番手っ取り早い。

自己嫌悪に陥って落ち込む彼に、そっとキスをする。すると彼は、じい、と僕を見つめてから、僕の目じりに残る涙を親指で拭った後、前髪をわけて視界を開けた。クリアになった僕の目の前には、不安げに瞳を揺らす爽が映る。

「俺のこと好き？」

「好きだよ...？」

「愛してる？」

「愛してるよ」

「どのくらい？」

「...？世界で、一番くらい...？」

「...ふうん？まあ俺は宇宙で一番くらいだから、今度はもうちょっとスケール広くしといてね」

けれど僕とて、落ち込んだ彼の相手をするのは慣れっこだ。お怒り&お仕置きにブレている時は謝るしかないけれど、反省し始めたらある程度冷静になっている。そこで甘やかしてやれば、ほぼ復帰完了だ。だから僕からのストレートな愛情表現に満足した彼は、見事にほくほくした表情になっている。それを見た僕も、よしよし、これで今日のいざこざも一件落着か、なんて安心したんだけど。まだ抜けていなかった彼の熱が、ぐいんと僕の中で存在感を増し、かつ動き始めたので血の気が引いた。

「ひいっ！？待っ、な、もう今日は、終わりじゃ」

「ん？だってまだ俺イッてないもん」

「んなっ、僕はもう、ありえないくらいイッた、の、ん、んあ、も、無理だ、って、今日は無理！」

「一回だけ、一回だけ付き合って。そしたらやめる」

「う、ん、んん〜〜〜〜っ...！」

爽曰く、どうやら僕はとにかく彼はまだ出していないので、そこまではしないと収まらないということらしい。僕も男ではあるので、ここまで盛り上がった以上出さないとスッキリしない気持ちは分かる。それに、手でしたり口でしたりして収めてあげる手もあるが、今の体力的に僕側が頑張るのはキツイ。だったらこの

まま爽にされるがママの方がマシかもしれないと、脳内会議で瞬時に答えを出した。

頼むから早く終わってくれと、願うように彼に抱きつく力を強める。盛り上がりばいいという気持ちだけを込めてキスをした。実際それは効果的で、彼の腰遣いはいっそう激しくなっていく。

「ひっ、あ、あっ、は、げし、んんっ、爽、爽う...っ！」

彼を掻き立てるためにと抱きついたのに、気が付けば自分が振り落とされないように必死になっていた。上から熱のこもった息が降ってくる。爽の方も僕に気を使えないくらい夢中になっているのが見えると、それはそれで愛されている感じがするから不思議だ。

「ふ、っ、ん、ん、ん、あ、ああ、あっ、ひ、う、あ、あ、爽、イッ、く、う、後ろで、イッ...！」

「ん、うん、俺も、も、出そう、かも...！」

「あ、あ、出し、て、爽のほしい、いっぱい、出してえ...！」

彼の腰の打ち付けが大きくなるほどに、切羽詰まっているのが分かる。僕も負けじとしがみついて、彼の射精を促した。ほどなくすると、ぐぐ、と僕の奥の方に進んできた爽の自身から、どくり、どくりと熱いものが吐き出される感覚がする。

は、は、と上から荒い呼吸と、ずっしり重みのある体が落ちてきて、僕はようやく今日のセックスの終わりを感じた。すり、と爽の腰を撫でると、満足したのか彼も僕を抱きしめてくる。けれどその腕が、なぜか僕の膝の裏を抱えたから少し驚いた。

「爽...？な、に、してるの...？」

「あ、ちょっとまだムラっ気が収まらないからもう一回いいかなと思って」

「いっ、いやいやいやっ！一回だけって言ったよね！？そしたらやめるって！」

「でも三樹、俺以外からプレゼントもらってくるのは一回じゃなかったじゃん。自分は許してもらっておいて、俺はダメなの納得いかない」

「なっ...！そ、それとこれとは」

「ねえいいでしょ？あと一回。ね？それでやめるから」

「ふ、あゝ、い、言ってるそばから、んっ、んんんん〜〜〜っっ！！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー